

余命一ヶ月の公爵令嬢ですが、
独占欲が強すぎる天才魔術師が
離してくれません!?

プロローグ

「クロム・スピアーズ！ 古代魔道具研究家のクロム・スピアーズはどこらに!?」

ここは、辺境の地に建てられたとある研究所。一分一秒でも惜しいとばかりに扉を開け放ったアリーチェのほうへ、室内にいた全員の視線が集まった。

「……貴女は……?」

後方に女性騎士を従えた、左右が黒で後方部分が銀色の長い髪をした二十歳前後の令嬢。瞳の色と同じ蒼い耳飾りとブローチをしており、シルクを思わせる白銀の美しい装いからも、アリーチェが高貴な身分であることは一目見ただけでわかるだろう。

「先に連絡がいつているはずだけど!？」

焦りもあり、つい気位の高そうな物言いになってしまいが、今のアリーチェにはそこまでの気が回らない。

「私はアリーチェ。マクラーゲン公爵家の一人娘のアリーチェ・マクラーゲンよ！」

聞いていないのかと吊り上がる眉に、室内にいた五人のうち、一番位が高いのであろう初老の男性が「ああ……」という呟きを洩らした。

「聞いております」

「だったら……！」

ならば早くと促すアリーチェに初老の男性は小さな溜め息を一つ零し、後方にいる四人の研究員のほうへ振り返る。

「誰かクロムを呼んできてくれ」

それに「はーい」とどこかやる気のなさそうな返事をしたのは、一番年下に見える青年だ。

「早くしてちょうだい……！」

急かすアリーチェへやれやれという一瞥を投げ、青年は欠伸でもしそうな緩い足取りで部屋を後にする。

そうして、時間にしてどれくらいたっただろう。それなりには経過したであろう長い待ち時間に、アリーチェの焦りと苛立ちはいちだに達し、爆発してしまいそうになった頃。

「所長。呼びました？」

これまたのんびりと現れた長身の青年に、所長と呼ばれた初老の男性は、肩を落としつつアリーチェを顎で指し示した。

「お客さんだ」

「……俺に、ですか？」

きよとん、と丸くなる赤い瞳に、所長はやれやれと空を仰ぐ。

「ああ。先日手紙を見せただろう」

「……そういえば」

すっかり忘れてました。という言葉でも続きそうな青年に、しばし固まっていたアリーチェはおずおずと口を開く。

「……あ、貴方があの有名なクロム・スピアーズ？」

クロム・スピアーズといえば、アリーチェより三歳年上の二十三歳。その界限では知らぬ者などいない、古代魔道具研究の第一人者で「天才」と言われている人物だ。

「有名かどうかはわかりませんが、多分そのクロム・スピアーズです」

「貴方が……」

のんびりとした喋り方は、「天才」と同じくらい名高い「変人」の名に相応しいものだったが、想像とあまりにも違う風貌にアリーチェはじろじろとクロムを観察してしまう。

周りの目を気にしていないことが窺える野暮ったい服装と、寝ぐせさえ直されていない金色の髪だが、顔面偏差値は異様に高く、眼鏡の奥にある赤い瞳は引き込まれそうな妙な妖しさがあった。

「なんですか？」

「い、いえ……。なんでもないわ」

相手の目を真っ直ぐ見てくるクロムに不覚にもドキリとしてしまい、アリーチェは「オ・タ・ク・のくせに……！」などと偏見も甚だしいことを思いながらわずかに視線を逸らす。

「で？ 公爵家のお嬢様が、こんなところにお忍びでなんの用事です？」

「……そ、それは……っ」

頭の後ろを掻きながら面倒くさそうに尋ねられて答えに詰まる。

公爵家の令嬢であるアリーチェが、自らこんな辺境に足を運んだ理由。それは。

「……人払いをお願いしてもいいかしら？」

「人払いを？」

少しばかり恥ずかしそうにチラリと視線を投げたアリーチェに、クロムはきょとん、とした反応を返してくる。

「へ、変なことは考えないでよ……!？」

「……変なこと……」

年頃の男女が二人きり。アリーチェにとつてはありえない状況だが、眉を顰めるクロムは本気で意味がわからないようで、逆に羞恥を煽られる。

「い、いいから……！ 早くしてちょうだい……!？」

その場にいる人間を追い払うように室内を見回すアリーチェに、所長たちからは生ぬるい目が向けられる。

「それが人にものを頼む態度かねえ」

ここは、*“変人たちの巣窟”*と名高い場所。とても公爵令嬢を相手にする態度とは思えない言動にアリーチェが言葉を失う中、男の一人がやれやれと肩を落とす。

「へいへい。公爵家の御令嬢には逆らいませんよ」

そうして所長が「ほら、いくぞ」と促せば、彼らは「はい」と返事をしながらぞろぞろと扉の

ほうへ向かっていく。

そんな彼らのあまりの不遜な態度にアリーチェが呆気に取られている間に、唯一の従者だった女性騎士も無言で頭を下げて部屋を後にする。おそらくは扉の外で待機しているつもりなのだろう。

「で？」

二人きりになったところで不躰に見下ろされ、アリーチェはつきよとんと瞳を瞬かせる。

「俺を訪ねてきたのはそっちのほうでしょう」

「そ、そうね……」

あまりの驚きの連続でつい本題を忘れてしまっていた。そして、往生際が悪いことに、まだ心の準備が追いついていない。アリーチェはコホンと小さく息をついたところで……

「その呪い、どうしたんです？」

単刀直入、あまりにもあっけらかんと問いかけられ、アリーチェは大きく目を見張った。

「わ、わかるの……!？」

「……はあ、まあ……」

どうにも緊張感のない返答に、アリーチェは掴みかかる勢いでクロムのほうへ身を乗り出した。

「どうすれば解けるの!？」

「どうすれば……」

「謝礼は弾むわ……！ なにか欲しいものがあるなら、公爵家の名にかけてできるだけのことをするから……!？」

クロムの「天才」という評価はたしからしい。一目でアリーチェの事情を見抜いたクロムに、アリーチェは鬼気迫った目を向ける。

「早急に解いてほしいの……！」

「……まあ、そうですね……。事態はなかなか深刻そうですね」
「え……？」

まじまじと見下ろされ、アリーチェの胸には嫌なざわめきが湧いた。

自分が呪いにかかっていることは知っている。そしてそれが、「古代魔道具」によるものだということも。だが、「深刻」とはどういうことか。

「これはまた随分と厄介そうな……」

「見なくてもわかるの!?」

王都の高位魔術師たちでさえ、ただアリーチェと対面しただけではわからなかった。

そんな魔術を、クロムは目にしなくてもわかるというのだろうか。

「……まあ、なんとなくは。でも、きちんと見てみないことには正確な判断はできません。……どこかに印が浮かんでたりします?」

覚悟をしていたとはいえ当然すぎる要求に、アリーチェは一瞬息を呑む。

「あ、貴方……つ、女性関係は……!?」

「……は?」

途端真っ赤になって瞳を潤ませるアリーチェに、クロムの訝しげな目が向けられる。

アリーチェのその反応は仕方のないものだ。なぜなら。

「……む、胸元に……っ!」

ぎゅ、と固く目を瞑り、勇気を振り絞って告げたアリーチェへ、けれどクロムは「……ああ」と納得の声を洩らしながらも態度はまったく変わらない。

「でも、見てみないことには」

——「天才」と名高いクロム・スピアーズは、「変人」で、古代魔道具以外は人間にさえ興味がない。

そんな彼の噂もあながち間違っていないらしい。それでも。

「ぜ、絶対に変な気を起こさないでよ!」

アリーチェは、花も恥じらう年頃の乙女。

「……そんなに嫌なら俺はいんですけど」

思わず自分の身体を抱き締めて羞恥で瞳を潤ませるアリーチェにも、変人・クロムは容赦がない。早くしなければすぐにでも欠伸をしながら部屋を出て行ってしまうようなクロムの雰囲気、アリーチェはこくりと息を呑む。

背に腹は替えられない。王都の高位魔術師は全員匙を投げた。

もはや頼ることができるのは、「天才古代魔道具研究者」のクロムだけ。

このためにわざわざ選んだ前開きドレスのボタンを震える指で緩慢に外し、アリーチェは顔を真っ赤にしながらそろそろと深い胸の谷間を覗かせる。と……

「……これはまた随分と根が深いですね……」

そこに刻まれた赤黒い文様をまじまじと見つめたクロムが神妙な吐息を洩らした。

「それってどういう……」

「たしかに、早急に呪解しないと」

不安げに瞳を揺らめかせるアリーチェに、相変わらずの態度でクロムは淡々と口を開く。

「このままだと、一カ月後にはあの世逝きです」

「……っ!？」

下されたあまりにも衝撃的な内容に、アリーチェは真っ青になって言葉を失っていた。

第一話 婚約解消

すべての出来事は、アリーチェの元に王太子ハインツの名で届けられた首飾りから始まった。

「まあ……。なんて美しい……」

その晩開かれる第二王子の誕生日パーティー用にと贈られてきた箱を開けた侍女は、中央で光り輝く装飾品を目にして感嘆の吐息を零していた。

「アリーチェ様っ、見てください……っ」

「本当に。素敵だわ」

誇らしげな顔で振り返った侍女が掲げて見せた箱の中身に、アリーチェは穏やかに微笑みながら眩しげに目を細めた。

雲の形をした赤い宝石は光を受けて美しく輝き、シンプルな作りだからその気品が滲み出ている。誰の目から見ても最上の一品だろうことは明らかで、侍女の瞳もキラキラと嬉しそうに輝いた。

「アリーチェ様によくお似合いになりますよ……!」

箱ごとアリーチェの胸元に首飾りを掲げた侍女は、そのままにこりと顔を向けてくる。

「よろしければお着けしましょうか?」

「そうね。せっかくだから」

試着を勧めてくる侍女に、王太子からの手紙を眺めながら頷いた。そこには、今夜一緒に出席するパーティーには是非着けてきてほしいという旨と、プレゼントがぎりぎりになってしまったことへの丁寧な謝罪が書かれていた。右肩上がりの少しだけ癖のある綺麗な文字は、間違いなくハインツの直筆だ。

「失礼します」

侍女に促され、手紙をサイドテーブルに置いて髪を上げた。

首の後ろで金具が留められた気配がして、胸元にほんの少しだけ宝石の重みがかかる。

「よくお似合いです……!」

「ありがとう」

まるで宝石自身が発しているような光でアリーチェの胸元は美しく輝いていて、パーティー用の

ドレスを着れば、その赤い光がより一層眩く光るであろうことが想像できた。

「本当に綺麗……」

だが、その直後。赤い輝きの中に黒い染みのようなものが浮かび上がり、アリーチェは急に息苦しさを覚えて胸を掴んだ。

「……………っ!？」

心臓が驚揺みされたような感触を覚え、息の仕方がわからなくなる。

「アリーチェ様……………!？」

すぐにアリーチェの異変に気づいた侍女が声をかけてくるが、返事をすることもままならない。

「アリーチェ様!? アリーチェ様……………!？」

胸が締め付けられ、あまりの苦しさに口を開けても空気を吸えず、頭まで激しく痛み出す。

「……………あ……………」

「誰か……………っ! お嬢様が……………っ!」

どこか遠く侍女の叫びを聞きながら、アリーチェはか細い吐息を洩らし、意識を手離していた。

そうしてふと目を覚ました時。そこには、心配そうにアリーチェの顔を覗き込む王太子の姿があった。

「ハインツ様……………!？」

アリーチェの婚約者であるハインツ・ローゼンバークは、少し襟足の長い青い髪に金色の瞳をし

た美丈夫で、その精悍な容姿から女性たちの人気が高かった。

「私……………!？」

見覚えのありすぎる光景は、アリーチェが自室のベッドに寝かされていることを意味していた。

いくら婚約関係にあるとはいえ、今までハインツがアリーチェの部屋まで来たことはない。

「いいからアリーチェ……………!」

自分の身になにが起こったのかはわからないが、とにかく慌てて起き上がりとするアリーチェを、こちらも慌てた様子のハインツがベッドへ押し戻してくる。

「君は倒れて……………、丸一日意識がなかったんだ」

「え……………?」

アリーチェを気遣ってか、言い難そうに口を開いたハインツの状況説明に、アリーチェの瞳は呆然と見開いた。

「そう……………、なのですか……………」

病み上がりのような倦怠感は少しあるけれど、身体のだどこかに異常を感じたりはしていない。だが、さすがに丸一日意識を失っていたという事実は衝撃で、アリーチェは緩慢な動きでベッドサイドの椅子に座ったハインツの顔を見上げた。

「……………どうしてこちらへ……………」

いくら婚約者だからとはいえ、ハインツは王太子。そう簡単に自由はきかない。昨日も今日も、分刻みのスケジュールが組まれているはずで……………、などと考えて、アリーチェはハツとなる。

ハインツは、アリーチェの意識が丸一日なかったと言っていた。つまりは。

「パーティーは……っ!?」

「そんなことはないから」

真っ青になって身体からだを起こそうとするアリーチェを、困ったように微笑ほほえんだハインツが再びベッドへ押し戻してくる。

「まさか、欠席されたのですか……!?」

「アリーチェ。今はいいから」

事態が事態だ。婚約者パートナーがいなくともパーティーに参加することはできるだろうが、まさかと愕然がくぜんとするアリーチェに、ハインツは心配そうに眉を下げた。

「……それよりも、身体からだは大丈夫かい？ 突然倒れた、って聞いたけれど……」

「……あ……、はい……。とりあえず今はなんとも……」

「……そうか」

どことなく歯切れ悪く声をかけてきたかと思えば、気まずそうに顔を背けられ、アリーチェの胸には妙な不安感が湧き上がる。

「ハインツ様……?」

なにか……? とおずおずと窺うかがえば、ハインツはきゅ、と唇を嘸かみ締めた。

「……私が贈った首飾りを着けた直後に倒れたと聞いて」

「それは……」

そんなことで責任を感じているのだろうか。

まさかそのせいで忙しい公務の合間を縫ってアリーチェの元へ顔を出したのかと思えば、申し訳ない気持ちでいっぱいになってくる。そして、それと同時に首飾りのお礼をしなればと口を開きかけた時。

「……私は、君になにも贈っていないんだ」

「……え?」

ハインツから告げられた言葉に、アリーチェは一瞬固まった。

「君が眠っている間にマクラーゲン公に許可を得て、私が送ったという手紙を見せてもらった」

理解が追いつかずに二、三度瞳を瞬かせたアリーチェに、ハインツが静かな口調で説明を始める。

「たしかにアレは私の字だ」

アリーチェもたしかにハインツの直筆だと認識した、少しだけ癖のある綺麗な字。

「だが」

そこで苦々しげに表情かおを歪ゆがめ、アリーチェに向かってハインツははっきりと断言した。

「私には書いた覚えがない」

その言葉は静かな室内に妙に響き、アリーチェはやはり固まった。

「とりあえずあの手紙は預かって、鑑定に回してもいいかな?」

「は、はい……」

動揺のあまりなにかを考える余裕もなく、アリーチェはただ頷うなずいた。

「で、では、あの首飾りは……」

あの手紙は、王太子であるハインツの名で届けられた首飾りに添えられていたものだ。つまり、手紙が偽物であるというのなら、首飾りの贈り主もハインツではないということになるが……

「……私の名前を騙って君に害をなそうとする者がいた、ということだ」

ゆつくりと。だが、はつきりと告げられた言葉に、アリーチェの顔からは血の気が引いていく。

（……だ、から……）

そこでアリーチェは、あの首飾りがパーティー当日に贈られてきたことの意味を理解した。

ドレス選びのことを考えれば、普通は当日に身に着ける装飾品をその日に送ってくるなどありえない。だが、誰かが故意に送ってきたものだということのならば説明がつく。

時間的猶予がある場合、アリーチェがハインツへお礼の手紙でもしたためようものならば、贈り主が別人だということが露見してしまうからだろう。

「……まさか、そんなことが……」

呆然と呟くアリーチェにハインツは無言になり、そのなんとも奇妙な横顔に、心臓がドクドクと冷たく鳴り響く。

「……どうか……、したのですか？」

「それから……君の、胸元に……」

「……胸元……？」

顔を合わせることもなくぼつりと返されたハインツの言葉に、アリーチェは自分の胸元へ目を落

とす。

侍女が着替えさせてくれたのだろう。ゆつたりとしたナイトドレスの胸元からは当然例の装飾品は消えていて、だからといって特に違和感のようなものもない。だが。

「ごめん。医師と一緒にそこだけ確認してしまった」

ぐ、と息を呑んだハインツは、申し訳なさそうに謝罪してから、言い難そうに口を開く。

「……なにかの文様が浮かんでいるんだ」

「……文、様……？」

アリーチェは愕然とハインツの言葉を反芻した。

一体自分の身になにが起こり、なにを言われているのか理解できなかった。

「今、秘密裏に国中の高位魔術師を集めさせている」

なぜ、魔術師を——、しかも高位の者を呼び寄せる必要があるというのだろう。もはやハインツの言葉はアリーチェの頭に入らず、呆然と先の話をする。

「まだ、これは憶測の段階でしかないけれど……」

ドクドクと嫌な音が鼓動を刻み、指先が冷たくなった。

「宮廷魔術師の話によると……、その……」

「……なんですか？」

先を促すアリーチェが緩慢な動作で顔を上げたのは、もはや反射によるものだ。

「……それは、呪い」の類だろうと……」

「……呪、い……？」

一瞬その言葉の意味が理解できず、けれど脳のどこかはその意味を理解しているのか、アリーチェはただただ呆然と青白い顔をしたハインツの横顔を見つめた。

アリーチェの胸元に刻まれた印は、毒々しい華模様の呪い。

なんの呪いかもわからないそれに、アリーチェは再び意識を失いそうになっていた。

アリーチェは、一風変わった伯爵家出身の母親と、そんな母親を溺愛する、現マクラーゲン公爵家当主である父親の元に生まれた。仲のいい両親から充分な愛情を注がれて、これまた充分すぎる教育を受けてすくすく育ったアリーチェが王太子の婚約者選ばれたのは、今から五年前の十五の時。

恋愛結婚をした両親は——特に母親のほうは——渋い顔をしたものの、アリーチェはなんの不満もなく王太子の婚約者という立場を受け入れた。

なぜなら、アリーチェほど王太子妃に、そして未来の王妃として相応しい令嬢はいないという自負があったから。

愛し合って結婚をした両親を見ていると、王太子と自分がそんなふうになれるとはとても思えなかったが、それでもそれなりに仲は良かった。恋人同士というよりは仕事上のよきパートナーであり理解者、というような関係に近かったが、特に不満を感じたこともない。アリーチェの両親が少し変わっているだけで、本来高位貴族の婚姻など、政略的な意味合いが強い、当人同士の意思など

関係ないものだ。

だから、このまま順調に王太子妃となり、ゆくゆくは王妃となって共に国を導いていくのだと信じて疑っていなかった。

——そう。この事件が起こるまでは。

「婚約を、解消……？」

「……そうは言っていない」

ここは、国王との謁見室。アリーチェが呆然と洩らした呟きに、ハインツの父である国王は、額に気難しげな皺を寄せていた。

「ですが、つまりはそういうことでしょうか？」

「……アリーチェ」

「婚約解消」という言葉をオブラートに包んだ遠回しな言い方ではあったものの、結論はそう言っているようなものだとはっきり告げたアリーチェに、隣に立ったハインツは苦虫を噛み潰したような表情になる。

「私も、こんな形で婚約解消は望んでいない。だから、できることなら君を待ちたいと……」

「ハインツ」

きゅ、と眉を寄せたハインツの言葉を遮ったのは、彼の父親である国王だ。

「父上……っ！ 今まで私の婚約者として懸命に仕えてくれたアリーチェに対してのこの仕打

ち……っ、あんまりです！」

将来の王太子妃として、婚約が決まった時から、アリーチェは日々王宮に通い、ハインツの補佐的役目を担って今日まで過ごしてきた。そんなアリーチェをこんなふうに簡単に切って捨てるのかと訴えるハインツに、国王の苦々しげな顔が向けられる。

「ハインツ。気持ちわかる。だが」

「父上っ」

鋭く自分を射貫く息子の視線にますます苦渋の表情を浮かべて、それでも国王は言い切った。

「だが、呪い持ちの娘をこのままお前の妃にすることは叶わん」

そう――、アリーチェの身体の中には今、呪い^{からた}が巣食っている。

このせいで今、アリーチェは国王から婚約者の立場を辞退してほしいと遠回しに告げられているのだ。

「ですから、解呪を待つと……！」

「魔術師全員が匙を投げた、どんなものかわからない呪いが解けるのを、か？」

国王に食ってかかりかけたハインツは、まず無理だろうという厳しい瞳を前にして言葉を呑み込んだ。

アリーチェにかけられた呪いを解くために呼ばれた高位魔術師たちは何人いただろうか。王家お抱えの魔術師から名の知れた魔術師まで、その全員が呪いの種類すらわからず降参した。

そんな未知の呪いをどうやったら解けるというのだろう。そして、呪いの中身がわかったとして

も、果たしてそれを解ける者がいるだろうか。

「……で、すが……」

「ハインツ様。私は大丈夫ですからお氣になさらず」

「っ、アリーチェ……！」

悔しげに唇を噛み締めたハインツに、アリーチェが背筋を伸ばして気丈にも微笑んでみれば、その顔は苦しげに歪んだ。

「陛下の言う通りです。解呪できるかできないかの問題の前に、どんな呪いをかけられているかわからない者を王太子である貴方の傍に置いておくことはできないでしょう」

アリーチェが呪われていることがわかって、その呪いの中身がわからない。呪いの対象がアリーチェ一人であればいいが、もし、万が一にも周りを巻き込むようなものであったなら。

アリーチェが王太子の婚約者であることは誰もが知っている。もしかしたら、アリーチェを使つて王太子や国王に害をなそうと考えている者の仕業であるかもしれないのだ。そんな人間を、王族の傍に置いておくわけにはいかないだろう。

「……アリーチェ殿……。すまない」

「いえ……」

理解に感謝する、とでも言いたげな国王に、アリーチェは小さく頭を振った。

誰からも見えない位置でぎゅっと拳を作って一度唇を引き締める。

これは、アリーチェの本意ではない。本当は悔しくて悔しくてたまらない。

だが、ここで大騒ぎすることはアリーチェの矜持が許さない。だから。

「今までお世話になりました。荷物を纏めて実家に下がらせていただきます」
筆頭公爵家の令嬢として相応しい美しい礼を執り、アリーチェは颯爽と部屋を出たのだった。

(とにかく、今後の身の振り方を考えなくてはならないわ)

執務室で一通りの身辺整理を終えたアリーチェは、最後にぐるりと室内を見回して忘れ物がな
いか確認すると、きゅつと唇を噛み締める。それからくると踵を返すとほんの一瞬だけ足を止め、
すぐになにかを振り切るように城の外に向かって歩き出す。

——決して振り返ったりはしない。

胸の奥では衝撃や動揺、驚愕や悲痛といったさまざまな感情が渦巻いていたが、その中でも一番
に感じていたことは妙な虚しさだった。

王太子であるハインツとは決して愛し合っていたわけではないが、それでも婚約を解消されたこ
とは少なからずアリーチェにショックを与えていた。そういった意味では、ハインツが最後の最後
まで父親である国王に意見していた姿には胸を打たれた。互いに「政略結婚」だと割り切った関係
だったが、それでもそれなりの信頼関係は築けていたということなのだろう。

だが、それよりもなによりも。薄情な人間だと言われるかもしれないが、今まで王太子妃になる
ために積み上げてきた努力や培ってきた経験が無駄になったことが、なによりもアリーチェに打撃
を与えていた。

(……呆気ないものね)

こんなふうに、思い描いていた未来像が一瞬で儚く消えてしまうなど。
「……あら？」

そんなことを考えていると、気づけば見慣れぬ場所まで来てしまっていた。

アリーチェらしからぬ失態だが、やはり精神的な打撃は大きかったらしい。王宮の出入口とはま
るで反対側。裏手にある植物園近くまで来てしまっていたことに、アリーチェは心の中で自嘲する。
(いやね。私としたことが)

植物園はその名の通り、植物が育てられている小さな裏庭だ。季節折々の美しい花が咲き乱れる
庭園や中庭とは違い、主に葉草などが育てられていたように記憶する。そのため、王宮内の目立た
ない場所にひっそりと造られていた。

人々の目を楽しませる華やかな庭園と、人々に役立つ植物が栽培されている地味な裏庭。

今まで気にも留めていなかったことが突然気になってきて、アリーチェは全体的に地味な草花を
見回した。ふと顔を上げた視線の先にはそれなりの大きさをした温室もあり、その扉が薄く開いて
いることに気づいてアリーチェの目はわずかに見開いた。

(……少し見て帰るくらい……、いいわよね?)

こんなところに来るのは、きつと最初で最後だろう。

そう思えば、王宮を去る前に少し寄り道をするくらい許されるだろうと、少し大胆な気持ちで湧
き上がる。

「……お邪魔いたします……」

近くに人がいたとしても聞こえないくらいの声で扉を押し、おずおずと中へ足を踏み入れる。

(……今まで来たことはなかったけれど、こんなふうになっているのね……)

目の前に現れた光景は緑一色の世界。庭園や中庭のような色鮮やかな華やかさは一切なく、低木や緑が広がっているだけの素朴な空間。けれど、陽の光を受けて輝く草木は美しく、アリーチェの感性は、これはこれでもとてもお洒落な世界だと認識した。

不思議と落ち着く感じがする空間に、知らず肩の力が抜けていく。

どこからか水の音が聞こえてくるような気がするの、水生植物も育てているからだろうか。

(なに、か……?)

と、ふいに自分以外の気配を感じ、アリーチェは草陰に隠れるようにしながらも、そっとそちらのほうへ足を向けた。

(人の、声……)

温室の扉が開いていたことを思えば、先客がいると考えたほうが自然だろう。とするならば、どちらかといえばアリーチェのほうが招かれざる客ということになる。

こんなところにいたことが知られて大事になってはたまらないと、自分以外存在を確認しようとしたアリーチェは、その瞬間ぎくりと足を止めて肩を震わせる。

思わず口元を手で覆い、そこにいる人物を凝視した。

(……殿、下……!?)

こちらに背中を向けていてもわかる。奥の少しだけ開けた空間にいたのは、もう会うことの許されない元婚約者、ハインツだった。

(こんなところで一体なにを……)

低木に身を隠しながらそっとハインツを覗き見たアリーチェは、そこにある影が一つではないことに気づいて大きく目を見張る。

長く伸びる葉と、他でもないハインツの陰になって一瞬気がつかなかった人物。

こちらに背中を向けたハインツの陰に隠れてしまうほど密着しているその人物は。

(……あれは、伯爵家の……)

しっかりと抱き合っている二人の姿を愕然と見つめ、アリーチェは冷水を浴びせられたかのように身体が冷えていくのを感じた。

「ハインツ様……っ」

「ああ、イザベラ。会いたかったよ」

「わたくしもです……っ」

感極まった様子で互いを抱き締め合う二人からは、彼らがここで落ち合つてすぐであることが窺えた。

「もう少しだ、イザベラ。もう少しだけ辛抱してくれ」

ハインツが顔を上げさせ、艶やかな黒髪をそっと撫でている相手は、レーガン伯爵家の娘・イザベラだ。社交界でも美しすぎると有名なイザベラは、髪を撫で下ろすハインツの手にうっとりとし

た表情を返しているが、『辛抱』とは一体なんのことを言っているのだろうか。

状況が呑み込めず、ただその場で二人の遣り取りを見守ることしかできないアリーチェは、次の瞬間、己の耳を疑った。

「さすがに婚約を解消したばかりですぐに君を迎えるわけにもいかない」

「そんな……」

言われた言葉がよほどショックだったのか、イザベラの顔は動揺で青白くなっているものの、アリーチェの受けた衝撃はそれ以上だ。

アリーチェがハインツとの婚約を白紙にさせられてからまだ半日もたっていない。

アリーチェが呪いにかかったのは半月ほど前の出来事だが、そのあとすぐに次の婚約者候補が挙げられていたとでもいうのだろうか。

——それにしては二人の会話は違和感がありすぎた。むしろ、それらの会話からは……

(……ま、さか……)

身体中から急速に熱が引いていき、口元を手で覆ったアリーチェは身体を小刻みに震わせる。

信じがたい憶測が頭の中を過ぎたが、いくらなんでもそんなことはありえない。

だが、湧いた疑念を必死で否定しようとするアリーチェに、残酷な現実が突き付けられる。

「でも、必ず君を妻にするから」

イザベラへそう語りかけるハインツの声色には、アリーチェが今まで聞いたこともないような熱がこもっており、その事実にも大きな衝撃を受ける。

「こんなふうに陰でこそこそ会うのではなくて、早く堂々と君といたいよ」

「ハインツ様……」

ハインツから向けられる赤裸々な愛の言葉に、イザベラは嬉しそうに目の前の胸元へと顔を寄せ、感極まった声を上げる。

(……う、そ……)

ハインツの言葉は、この逢瀬が少なくとも数回は繰り返されていることを示していて、アリーチェの疑念を確信へ変えるには充分すぎる遣り取りだった。

イザベラとの逢瀬がアリーチェと婚約を結んだ後からなのか、そもそもその前からだったのかはわからないが、どちらにせよハインツの心がイザベラに向いていることだけはたしかだろう。

あまりの衝撃の事実顔面蒼白になるアリーチェだったが、驚愕の会話はそれだけでは終わらなかった。

「……本当に、上手くいってよかったですわ」

「そうだね」

につこりと微笑んだイザベラに、ハインツが真面目な顔で頷いた。

今度は一体なんの話をしているのだらうと愕然とするアリーチェの瞳に、苦々しい表情を浮かべたハインツの姿が映り込む。

「いくら筆頭公爵家の娘だからと、強引に婚約させられてはたまらない」

(……っ!?)

アリーチェとハインツの婚約は決して強引に推し進められたものではないはずだが、ハインツのその発言は確実にアリーチェとの婚約を批難するものだった。

まさかハインツが自分との婚約をそこまで疎ましく思っていたとは想像すらしていなかったアリーチェは、血の気を失った顔で二人を見続けることしかできなくなる。アリーチェと共にいる時のハインツは優しくて。そんなことを思っているなど、微塵も感じたことはなかったのに。

「ハインツ様……」

イザベラはうつとりとハインツへ身を任せ、二人はそのまましばらく無言で抱き合った。

辺りにはどこからか聞こえてくるかすかな水音だけが響き、長いのか短いかわからない時間がたった頃。

「……ところでイザベラ」

やっと満足がいったのか、ゆっくりと身体を離れたハインツから向けられた呼びかけに、イザベラは紫色の大きな瞳を返す。

「はい」

「例の、首飾りに込められていた呪いのことだけれど……」

耳に飛び込んできたハインツの言葉に、アリーチェの瞳は大きな打撃を受けて見開いた。

「一体なんの呪いなんだい？」

集められた魔術師全員が解析不可能だと申し訳なさそうに首を振ったアリーチェの呪いに関することを、なぜイザベラに問いかけるのか。

その、イザベラが呪いの種類を知っているかのようなハインツの疑問は、まるで……

「それが、あいにくわたくしにもわかりませんの」

「わからない!？」

申し訳なさそうに眉を下げたイザベラの表情は、アリーチェさえ思わず手を差し伸べてしまいたくなるほど美しかった。

そして、驚いたように目を見張ったハインツに、イザベラは困ったような微笑みを浮かべてみせる。

「はい。わたくしも人に薦められるまま買ってしまったものです……」

「……そうか……」

小さな嘆息一つであつさりとそれを受け入れるハインツは、なにを考えているのかアリーチェには理解できなかった。

あれほど必死になってアリーチェの呪いを解こうとしていたハインツはなんだったのだろう。

アリーチェの呪いが解けるまで待つと国王に食いが下ったハインツは。

あれらはすべて偽りの姿だったというのだろうか。

「ですが、そう気に病むことはありませんわ」

につこりと微笑んだイザベラは、甘える仕草でハインツの肩へと手を伸ばす。

「実際、アリーチェ様はお元気にしてらっしゃるではありませんか」

「そう、だね……」

少しだけ悩むような様子を見せながらも、ハインツがアリーチェにかけられた呪いについてイザベラを追及するようなことはない。罪悪感の欠片も見えない二人は、互いの身体に触れ合ったまま。「それより殿下」

そこでしつとりと微笑んだイザベラがほんの少しだけ顔を上げ、なにかをねだるような目を向ければ、ハインツはそつと身を屈めて顔を寄せる。

「……ん……」

（——っ！）

アリーチェの場所から肝心な部分は見えないが、一つに重なった二人の影がなにをしているかなど、イザベラの口から洩れてくる甘い吐息を聞けば明白だった。

「今夜はお会いできませんの……？」

どこか寂しげで、それでいてうつとりと誘うようなイザベラの甘い声に、そこで初めてアリーチェの指先はびくりと動いた。逃げようとするかのように足は後ろに下がり、身体は小刻みに震え出す。

（……こんなこと、つて……！）

呆然と二人の姿を見つめたまま、アリーチェはじわりじわりと距離を取り、二人の姿が完全に視界から消えた後。

（……まさか、私の呪いは殿下とイザベラ様が……!?）

あまりのショックから知らず涙を流していたアリーチェは、くると踵を返すと逃げるようにし

て王宮を後にしたのだった。

第二話 天才と変人は紙一重

「なるほど。つまり、すべては外部犯に見せかけた王太子の自作自演だったと」

ここに至るまでの経緯を聞き終えたクロムは、特段表情を変えることもなくただ淡々と頷いた。その反応から見ると、アリーチェの事情になど興味がないのだろう。

「……そういうことになるのかしらね？」

こんなことになっても未だに認めたくない部分があるのか、つい遅くなってしまう反応に、アリーチェは心の中で自嘲する。

この話をしたのはクロムが初めてだ。

とてもではないが、自分にかけられた呪いが王太子の策略によるものだとは誰にも話せなかった明確な証拠がない以上、そんなことを口にしたらアリーチェの立場のほうが悪くなる。

少なくとも現状、王家そのものはアリーチェの呪いを解くために手を尽くしてくれてはいるのだから。

「ようするに王太子は、貴女と婚約を解消し、別の女と一緒にいたかったと」

「っ。そうよ……っ。そういうことよ……！」

淡々と状況を分析され、アリーチェはぐつ、と唇を噛み締める。

わかつてはいても、改めてその事実を突き付けられると胸にズキリとした痛みが走った。

それは、王太子に対する長年の情からか、それとも悔しさからか。

アリーチェがハインツに抱く感情は決して色恋ではなかったが、それでもたしかな信頼関係は築けていたと思うのだ。もし、どうしても他に一緒にいたい女性ができたと相談されたなら、それはそれでちゃんと真摯に向き合っただろうと思う程度には。

それなのに、まさか呪いでアリーチェを排除しようとするほど疎ましく思われていたなんて。

「で。その方も呪いの中身はわからないと話していたと」

決して同情してほしいわけではなかったが、あまりにも淡々と確認され、アリーチェは少しだけ呆気にとられつつ慌てて首を縦に振る。

「そ、そうよ……！」

なぜだろうか。変人、クロムと話していると、自分のペースを乱されて、うだうだ悩んでいることが馬鹿馬鹿しくなってくる。研究オタクのクロムにとって、アリーチェの気持ちや事情など二の次三の次。古代魔道具研究家・クロムの関心は、物珍しいアリーチェの呪いのみに注がれている。そんな、アリーチェ自身のことなどどうでもいいと言われているかのような態度には腹が立つというのに。と、同時に、妙な安堵の気持ちを感じてしまう自分も混在する。

(……ああ……、そうだわ……)

そこで、すとな、と胸に落ちたものがあり、アリーチェは唇を震わせた。

(……私は……、同情されなくなかったのよ……)

アリーチェがかけられた呪いに関しては箝口令が敷かれていて、事情は一部の人間にしか知られていない。それでもその「一部」の人間は……、アリーチェと近い人たちばかりだということもあるだろうが、一様に「可哀想に」という同情の瞳を向けてきた。

腫れ物に触るような扱いをされることが居たたまれず、哀しかった。

この後、本当の事情をなにも知らない人々が、婚約を解消されたアリーチェにどんな目を向けてくるだろうかと想像するだけで、悔しくて虚しくて仕方がなかった。

「天才」と名高いクロムの存在を知ってすぐ、解呪を口実に王都を飛び出してきた理由はこれなのだ。

——本当は。一刻も早く逃げ出したかった。

憐れみと同情の瞳を向けられることにはもううんざりだったのだ。

「……まあ、さすがに命にかかわることですし、なによりも興味深い検体には違いありませんし……」

(「げん・たい」……!? 今、「検体」って言った……!?)

聞き捨てならないことを聞いた気がするが、ぐつと怒りを抑えて黙り込む。

呪いを解くために、クロムは最後の頼みの綱なのだ。

「いいですよ。そのご依頼、お引き受けします」

心なしかその瞳と声色が弾んでいるように見えるのは……、きつと気のせいだ。

「その代わり、条件があります」

「条件……？」

「はい」

高位魔術師の誰一人としてわからなかった難解な呪い。そんな呪いを解いてくれるのなら、いくら支払ってもかまわない。だが、深々と頷いたクロムは、拍子抜けするような条件を提示した。「貴女も、きちんと協力してください」

「……………はあ」

きちんとともに、呪いはアリーチェの身に宿っているというのだから、消極的になるはずもない。

なにを言っているのかと気の抜けた答えを返したアリーチェへ、クロムは「それならいいです」
とでもいうかのようにわずかに微笑んだ。

「では、さっそくですが」

そうしてアリーチェへ向けられた真剣な瞳。

「触らせてください」

「……………はい？」

なにを？ と目が点になり、しばらくしてその言葉の意味を理解したアリーチェは、そのまま悲鳴を上げてクロムを平手打ちしなかった自分を褒め称えてやりたくなくなっていた。

アリーチェの母親は少し変わっていて、「自分のことはすべて自分でできるように」が教育方針だった。そのため、普通の貴族令嬢であれば一生することなどないような、掃除から洗濯、料理までの家事を一通り覚えさせられていた。ついでに言えば、護身術も一通り習わされていたりする。（……まさかお母様の趣味がこんなところで役に立つなんて……）

大きな鍋をお玉で掻き回しながら先ほど起こったことを回想し、アリーチェはしみじみとした溜め息を吐き出した。

『さすがに解呪は無理です』

まるで深刻さを感じない独特な声色でそう告げられた時には絶望しかけたが、すぐ後の「……今すぐには」という呟きに、アリーチェは目を点にしてそのまま固まった。

『それにしても、また随分と興味深いものが……』

胸元の文様をじろじろと見られ、思わず平手打ちしたい衝動に駆られてしまったが、クロムのその視線には一欠片の下心もなく、完全におもしろい研究対象を前にした時の好奇心から来ているものだということがわかって、アリーチェはなんとも複雑な気持ちになってしまっていた。

『ここまで保存状態のいい魔石はなかなかないですよ!』

例の首飾りを手渡せば、クロムは興奮したように瞳を輝かせ、すぐにでも解析に移りたいと弾んだ声を上げていた。

“天才”で“変人”で“オタク”。まさにこの言葉は彼のためにあるようなものではないだろうか。そんなわけで、無事彼の“研究対象”として認定されたアリーチェは、研究施設に留まることを

余儀なくされてしまった。元々その覚悟もしていたため、荷物の準備は万全だったが、まさか調理道具が欲しいと思うなどとは想像もしていなかった。

余命一カ月の呪いは、じわじわと身体を弱らせていくようなものではなく、突然命を奪う類のものだという。よって、現状は痛くも痒くもないため、死期がすぐそこに迫っていると告げられてもいまいち実感がなかった。とはいえ、恐怖がないわけではない。ないわけではないのだが……

保証などどこにもないというのに、彼に任せておけばきっと大丈夫だろうと思えてしまうこの安心感はなんなのか。

そんなこんなでアリーチェは今、楽しそうに研究室にこもって呪いの解析を始めたクロムと、研究員たちのためにシチューを作っていた。

研究員たちはこの施設に滞在し、日々研究に勤しんでいる。ここで一日を過ごしたアリーチェがまずびつくりしたのは、彼らの食事情だ。食事作りは当番制らしいのだが、空腹が満たさればなんでもいいといった程度のもので、栄養バランスなどなにも考えられていない。そんな料理を前にして、アリーチェの顔は引き攣った。そして仕方なく台所に立ち、今に至る。

どうせ特にすることもないのだ。早く解析を終わらせてもらうためにもより頭が働くように、アリーチェはまずは食事改善から取り組むことにした。

「あ！ シチューだ……！」

時刻はすでにお昼時。匂いを嗅ぎつけてきたのか、童顔の青年が鼻をくんくんさせながらやってきたかと思うと、その後からぞろぞろと他の研究員たちも食堂に入ってくる。

「シチューなんて食べるの何年ぶりだろう……」

シチューほどバランスよく栄養を取りながら簡単に作れる食事もないと思うのだが、彼らは本当に今までどんなものを食べてきたのだろう。

「いやあ、初めは居候なんて冗談じゃないと思ったが、毎日こんな食事が食べられるならずっといてくれてかまわねえぞ？」

「いいですね！ いっそここに住んじゃいます？」

がははと豪快に笑う中年男性に続き、先ほどの青年が明るく同意する。

昨日はアリーチェのことを余所者扱いしていたというのに、たった一日でこの身の変わりようはなんだろう。男は胃袋を掴めばイチコロだというのが母親の教えだったが、まさか本当にそんなことがあるとは思ってもみなかった。

「ところでクロムは？」

部屋に集まってくる研究員たちの中にクロムの姿を見つけれず、アリーチェはきよろきよろと辺りを見回した。

「あー……、クロムさんでしたら……」

「アイツは放っておくと平気で一食や二食忘れるからなあ……」

「は？」

そこで返ってきた研究員たちの苦笑いに、アリーチェの目は点になる。

「夢中になると、時間の経過も空腹も忘れるそうです」

「これぞ真のオタクだな」

「見習いたくないですねえ」

自分たちはそこまではないとしみじみと語る研究員たちに薄ら寒いものを覚えたアリーチェは、お盆に一人分の食事を用意すると、さっさとその場を後にする。

「アリーチェさん？」

「……みな様、勝手によそって食べてください」

「へ？」

「いつてきます」

目を丸くする研究員にかまうことなく食堂を出ると、昨日教えてもらったメイン研究室に向かい、部屋の扉をノックする。

「クロム……？」

が、返事はない。

「失礼します……」

仕方なくそつと部屋に足を踏み入れると、今までアリーチェが感じたことのない独特な空気感が漂っていた。

広い研究室の壁の一面は上から下まで専門書で埋められており、また別の一面は等間隔で作られた棚の上に魔法薬やら乾燥させた薬草らしきものやらが並べられている。大きな暖炉の横には引き出しのみの棚があり、厳重に管理されているのか一つ一つ鍵まで付けられている。

最後の一面にはたくさんの植木鉢に囲まれた大きな窓があり、魔法植物と思われるものが育てられていた。そしてそんな部屋の中央にいくつか置かれた机の一つが、クロム専用の研究机だった。

「……クロム……？」

「はい」

真剣な顔で机に向かっていているクロムへ遠慮がちに声をかければ、さすがにアリーチェの存在に気づいたクロムが顔を上げる。

「どうかしたんですか？」

「お昼を持ってきたのだけれど」

「そしたらそこに置いておいてください」

すぐに興味を失ったように手元へ視線を戻したクロムは、おそらくこのまま放っておいたら食事の存在を忘れるに違いない。先ほどの研究員たちの会話からも確信し、む、と眉間に皺を寄せたアリーチェは、強引にでも食べさせることにする。

食べ物を粗末にしない。

それもまた、母親が幼い頃から口を酸っぱくしてアリーチェに言い聞かせていた教えの一つだ。

「はい、あ〜ん」

病気の子供に食べさせるかのように、スプーンで掬ったクリームシチューをクロムの口元へ持っていく。その行為は嫌がらせのつもりでもあった。だが。

「……え……！」

クロムの口が自然と開き、アリーチェは驚きつつもクリームシチューを運んでやる。
もぐもぐと動いている口は、もはや条件反射だとか無意識に近いものだ。

「うーん……、手強いなあ……？ これでもダメか……」

なにやらぶつぶつと呟いているクロムは、おそらく今自分が食事をしているという認識すらないのではないだろうか。試しにもう一度シチューを運ぶとクロムの口は開かれて、ゆつくりと咀嚼する。

「……嘘でしょ!？」

こんなにかいがいしく世話をしようなど、本気で思っていたわけではない。けれど今さらあとには引けず、アリーチェは最後の一口までクロムの食事に付き合ったのだった。

第三話 余命のカウントダウン

二週間がたった。この頃になるとさすがのアリーチェも少しばかり不安に駆られないでもなかったが、胸元の文様以外に呪いの実感があまりないと、相変わらずの周りの能天気さ。そしてなによりもクロムがまったく焦りを見せていないことから、驚くほど普通の生活ができていた。

ちなみに、その間状況報告を兼ねて連絡を取った母親からは、アリーチェの思うように行動すればいいという返事をもらっていた。

「……あの……、クロム……?」

今日も今日とて雛鳥に餌を与える母鳥の如くクロムの口元にちぎったパンを運びながら、アリーチェはいい加減自分で食べてもらえないものだろうか、整ったその横顔を窺った。

「……ん……?」

なにをしているのかアリーチェには皆目見当もつかないが、魔道具らしきもので呪いを解析しようとしているクロムは悩ましげに眉を寄せ、手元の赤い宝石を真剣に見つめ続けたまま。

魔道具と宝石の反応を窺うようにしばらく手元を凝視して、酷くゆつくりと咀嚼したパンをゴクリと飲み下してから数秒後。

「……あ? なんですか?」

やつとその存在に気づいたかのように顔を上げたクロムに、アリーチェはがっくりと脱力してしまった。

「……なんでもないわ」

こんな遣り取りもはや何度目だろうか。

まるで幼い子供のように食べさせてもらっていることを、クロムは恥ずかしいともなんとも思っていない様子だった。クロムにとっては研究が一番。他のことは本気でどうでもいいらしい。

「いつまでこんなことを……!」

羞恥やら怒りやら、自分でもよくわからない感情で内心身体を震わせながら、アリーチェはスプーンを掬ったクロムの口元へ持つていく。もはや条件反射のように口を開けて与えられた

ものを咀嚼するクロムからは、美味しいとも不味いとも言われたことはない。どうやら猫舌らしく、最初の頃に「熱……っ！」と声を上げたくらいで、あとは本当に無反応だ。

(今度、激辛料理でも作ってやろうかしら)

なにを口にしても一切表情を変えないクロムに、思わずそんなことを考えてしまう。一日の中で一緒にいる時間はかなり長いというのに、会話らしい会話をしたことがあっただろうか。こうして手作り料理を直接食べさせているにもかかわらず、未だにクロムの好き嫌いもわからない。

(……嫌いなものがなくなつて、好きな食べ物くらい……)

クロムのことだ。食べられればなんでもいいくらい感覚なのかもしれないが、食べることに無頓着な人間にも「好みの食べ物」の一つや二つくらい普通あるだろう。

(……好きな食べ物がわかれば作るのに……)

なにを作ればクロムの関心をこちらに向けられるだろうか。

パンの最後の一片を咀嚼しているクロムをぼんやりと眺めながら、そんなことを考える。

別段料理が得意なわけでも好きだと思ったこともなかったが、研究員たちの喜びようを見ると悪い気はしなかった。むしろ、なんだかくすぐったい気持ちにさせられる。

(ち、違うわよ!? これは、呪いの解析をできるだけ円滑にさせるために……!)

人間、美味しいものを食べるという行為は、志気を高める効能があると思うのだ。

だから、ひいてはすべて解呪のため。つまりは、アリーチェのためになるからに違いない。

決して、「美味しい」と喜ぶクロムの姿を見たいからではなく。

(研究オタクのくせに……!)

残り少なくなったスープを片手に、よくわからない八つ当たりで肩を震わせる。

どこからどう見ても野暮ったいダサ男にもかかわらず、よくよく見ると妙に整った顔は世の中に謝れと言いたくなる。自分の外見など興味ないだろう研究オタクに、その顔は宝の持ち腐れだろう。

(……悔しいけど、綺麗な顔をしているのよね……)

婚約者だったハインツも、一般的には美形の部類に入るのだろうが、アリーチェの好みではなかった。一方、クロムは……

(……! 違うわ! 人間、中身よ! 中身……!)

うつかりとんでもないことを考えそうになったアリーチェは慌てて首を横に振り、思考を霧散させる。

(こんな……っ! 魔道具オタク……!)

研究が恋人という変人オタク。誰もが匙を投げた呪いの解呪に、唯一本気で向き合ってくれて……

(それは……っ! クロムがオタクだから……!)

アリーチェのためなどではなく、クロム自身の興味から。そう、思うのに。

(……楽、なのよね……)

地位や権力に一切興味がなければだろうか。アリーチェのことを特別視しないクロムの傍にいと、自然と肩の力が抜けるのだ。クロムの横顔を眺めていると、トクン……ッ、と胸が鳴り、ア

リーチェはぼんやりしながらクロムの口にスプーンを運んでやる。

そうして研究に没頭しているためか、妙に食べる速度が遅いクロムがスプーンの具を咀嚼そしぐしている間、アリーチェは机の上に置かれている紙にチラリと視線を投げる。

(……なにが書いてあるのかさっぱりだわ)

そこにはなにやら数式が羅列されていたが、アリーチェにはまったく理解できない。

アリーチェにも魔力というものはあるらしく、魔術学を学んだ結果、指先に小さな光を灯せる程度の初歩的な魔術を扱うくらいはできるようになっていた。だが、科学が進んだ現代において魔術そのものが衰退してしまった世界では、王宮付きの高位魔術師でさえ、せいぜい馬一頭を燃やし尽くすことができる火炎球を生み出せるくらいだ。それでも彼らが重宝されるのは、治癒力を上げる魔術を習得していたり、魔力がなければ作動させることのできない魔道具を扱えるからという理由が大きかった。

かつては国を滅ぼしかねない「魔女」と呼ばれる存在がいて、さらにそれを封印した天才魔術師がいたという伝説のような話も聞いたことがあるものの、それもどこまでが真実なのだろうか。

(……まさか、古代魔術文字、とか？)

元々魔術に関する文字自体が複雑で難解だ。知識だけを詰め込んだアリーチェの頭でつかちな理解では、「天才」クロムが書き殴る数式を読み解けるはずもない。それでも思わずそんなことを思ってしまうのは、彼が他でもない古代魔道具研究の第一人者だからだ。

クロムが研究・解析する分野の中には、古代魔術文字も含まれている。もはや解析不能と言われ

ている古代魔術文字だが、なぜだか彼であれば読めてしまえるかもしれないという気にさせられる。今まで使用用途が不明だった数々の魔道具を、クロムは数年で次から次へと解き明かしていったのだから。

(……クロム自身は魔術を使えない……、のよね……？)

古代魔道具の最大の利点は、一部を除き、基本的には魔力がなくとも使い方さえわかれば誰にでも扱えるという特徴にあった。魔道具の内部に魔石が埋め込まれており、定められた動作をするだけで動かすことができるのだ。

古代魔道具研究の第一人者として有名なクロムだが、クロム自身が魔術を扱えるという話は聞いたことがない。

「……はい。最後のデザート」

相変わらず一言の会話もないまま隣から指でつまんだ葡萄ぶどうを差し出せば、クロムはぱくりとそれに食いついた。

「……あ……っ」

と、その瞬間。指ごと口に含まれて、アリーチェの目は驚愕きょうわくで見開いた。

「……え？」

葡萄を口に含んで離れたクロムは、己がしたことに気づいていなくとも、思いの外大きな反応を示してしまったアリーチェには気づいたらしく、不思議そうな目を向けてくる。

横着をしてフォークを使わなかったアリーチェに問題がなかったとは言わないが、無意識に人の

指まで口に含んでしまうクロムもクロムだ。いくら手元の解析に没頭しているとはいえ、注意が足りなすぎる……、というよりも注意をしなすぎだ。

「……今……っ！ 指、を……！ 人の指まで……っ！」

なんだかものすごい羞恥を感じ、真っ赤になつて訴えるアリーチェに、きょとん、と目を丸くしたクロムは、そこでなんとなく事態を理解したらしく「ああ」と納得の吐息を洩らす。

「失礼しました」

なんでもないことのようにあっさりと謝られ、恥ずかしがっているこちらのほうがおかしいようなクロムの態度に、さらに顔が熱を持つ。

（指……っ！ 食べられ……!?）

そこまで大袈裟なものではないが、アリーチェにとっては衝撃だ。

指先を柔らかな唇に食まれた感覚は、妙に生々しくアリーチェの中に残っている。

そして意識してしまえば、葡萄を口にしたことで瑞々しく艶めく唇が色っぽくてドキリとする。

（なにドキドキしてるのよ……!）

動揺しているのがアリーチェだけでもなれば自意識過剰のようで、アリーチェは懸命に心音を抑えようと自分自身へ訴える。

（私はただの給仕係……!）

だが、そんなふうに焦るアリーチェの一方で、黙々と作業に戻ったクロムはなにやら眉間に皺を寄せて悩ましげな呟きを洩らす。

「ん……。この波動、なんか引かかるんだよなあ……」

アリーチェに対しては丁寧語を崩さないクロムだが、さすがに独り言まではそうではないらしい。「どこかで似たような波形を見たことがあるような……」

見た目は顕微鏡に似た魔道具を覗き込みながらぶつぶつと呟いているクロムの横で、アリーチェは無言に戻る。今までもこうして研究に没頭するクロムの姿を見てきたが、独り言とは珍しい。

「ん……?」

ますます顔を顰めて考えこむクロムに、アリーチェは食器を片づけてしまおうと席を立ちかける。「……ああ、そうか。もしかしたら」

が、なにやら活路を見出したらしいクロムの呟きに、アリーチェは思わず振り返る。

と。中途半端に立ちかけていた体勢のせいで、クロムの視線の高さにはちょうどアリーチェの胸元が晒されていた。そしてその、ドレスの胸元を。

「な……っ!? ななな……、な、ん……っ!?」

ぐい、と。なんの前置きもなく下ろされて、あまりの衝撃に真っ赤になって言葉を失った。

「ちよつと黙ってじつとしてて」

女性の胸元を覗き込みながら、クロムの瞳は真剣そのものだ。

もはや呪いの刻印を確認することしか頭にないクロムは、いつもの丁寧語すら忘れている。

「ちよ……っ」

思わず上げかけたアリーチェの制止の声さえ耳に届かず、胸の膨らみの間へさらに顔を近づけた

クロムは、じつ……、と呪いの文様を凝視して、次に珍しくも弾んだ声を上げる。

「なるほど！ とするならば……」

一步、解呪に近づいたらしい。だが。

「ん……っ」

胸元にかかった吐息に背筋がぞくりと震え、羞恥とはまた別の感覚に、アリーチェは心臓がドキドキと高鳴るのを感じた。

「……変態……っ！」

そうしてわなわなと身体を震わせたアリーチェは、クロムの顔へ平手打ちをお見舞いしてしまっていた。

朝。夜着を脱いだ時に胸元の文様を確認するのは癖のようになっていた。

現状を受け入れてはいるものの、未だにこれは悪い夢なのではないかと……、朝起きたら胸元の刻印が消えていたりしないだろうか、ついそんなことを考えてしまう。

そうしていつもと同じように鏡に映った己の胸元へと目を落としたアリーチェは、その瞬間、引き攣った悲鳴を上げかけて呑み込んでいた。

「ひ……っ!？」

胸の谷間近くに咲く毒々しい華の文様は、今日も存在を主張していて……、否、主張しすぎていた。

「……育って……、る……？」

昨日までと比べ、心なしか大きくなったような気がする華の文様を見つめ、アリーチェの心臓はドクドクと嫌な鼓動を刻む。新たに現れた華の蕾のような文様に、さらには細い蔦のようなものが生え始めている呪いの証は、まさに「成長している」としか言いようのないものだった。

「……な、んで……」

鏡に映る青白い顔をした自分自身を愕然と見つめ、アリーチェはすぐにハッとなると着の身着のまま小さな客室を飛び出した。

徹夜か、もしくは寝ても研究室で仮眠だけ、というクロムは、いつも通りそこにいるだろうか。

「クロム……ッ！」

ノックも忘れて扉を開け放てば、そこには自分の研究机に向かったクロムが丸い目をしてアリーチェに顔を上げていた。

「こんな朝早くからどうしました？」

いつもと変わらないクロムの姿に、知らずほっとしてしまうのはなぜだろうか。

アリーチェは無意識に小さな吐息をつき、それでも焦った様子でクロムへ訴える。

「も、文様が……っ！」

「文様が？」

きょとん、と続きを促してくるクロムに、じわりと涙が滲んだ。

「刻印が……っ、大きくな……っ」

立ち読みサンプル はここまで

全力で走ってきたせいか胸が喘ぎ、アリーチェは途切れ途切れに声を上げる。けれど、そんなアリーチェに視線を向けたクロムからは動揺も焦燥も見られない。

「……ああ……」

「なにか知ってるの……!？」

むしろこの事態を予想していたかのような薄い反応に、アリーチェの瞳は揺れ動く。

「……いえ……」

「なによ!? 勿体ぶってないで話してちょうだい……!」

たとえ可能性の一つだったとしても、こうなることを想定していたのだとしたら教えておいてほしかったと、アリーチェはうつすらと涙の滲んだ目でクロムを睨み付ける。

「……その……」

「早く言いなさいよ……!」

キッ! と八つ当たりのように鋭い視線を投げ、アリーチェは説明を求めて声を上げる。

「呪いが育つ・なんてことがあるの……!？」

小さな華の蕾に短い罵。まるでこれからさらに華が咲き、身体中に罵が生え伸びていくような感覚への空恐ろしさで、身体が震えてしまう。

「呪いが、発動の準備を始めた証拠です」

どことなく困ったように告げられて、アリーチェは一瞬啞然とした。

「……それ、つて……?」

「俺の見立てた通りです。少しずつ身体に根付いていった呪いが、発動十日前になつて全身へ浸透し始めたんだと思います」

「……は……」

「おそらくは、これから少しずつその文様が全身に広がっていくのだと思います」

アリーチェが感じた感覚は正しかったらしい。これから本物の植物のように少しずつ罵は伸びていき、胸元の華も毒々しく咲き乱れるだろうと説明され、今度こそ愕然と言葉を失った。

「だからといって、痛くも痒くもないかと。そういう類の呪いのようなので」

「……なにを呑気な……」

死ぬ直前まで肌に浮かんだ文様以外身体に変化はなにもなく、発動と同時に一瞬で命を奪う呪い。

「いえ。これでも少しは焦ってますよ? 思ったよりも解析にてこずっていて」

「そんな……っ!」

ここに来て初めて知らされた解析の進捗具合にアリーチェの顔は青くなる。

「ああ、でも、心配はしないでください」

にこりともすることなく、クロムはただ淡々と冷静な瞳をアリーチェへ向けてくる。

「貴女を死なせないことだけはお約束します」

「……え……?」

「ただ、今俺が持っているのは手段を選ばない方法なので、本当にどうにもならなかった時の最後の一手ですが」